報告ダイジェスト

・2025年度第３四半期理事会開催報告　（報告１）
・渋谷区職員交換研修報告　（報告２）
・ボランタリーフォーラム「満点見本市」報告　（報告３）
・ぱれっと親の会企画「新年会」　（報告４）
・ありがとう！えびす・ぱれっとホーム②　（報告５）

報告１　2025年度第3四半期理事会開催報告

少し前の報告になりますが、1月24日(土)に2025年度第３四半期の理事会を開催しました。ぱれっとでは以前から、年１回、１月に開催される第３四半期の理事会に、現場を支える職員にも出席してもらい、通常の報告に加えて現場からの生の声を届けています。当日は、シフトの関係でぱれっとホーム職員の出席は残念ながら叶いませんでしたが、おかし屋ぱれっと、工房ぱれっとから４名の職員が出席、総勢18名の理事会となり、活発な意見交換が行なわれました。各事業の通常報告に加え、おかし屋ぱれっと・工房ぱれっとの現場職員から、地域の小学生の作業体験受入、健康づくりのための運動プログラム、12月に開催した忘年会やビンゴ大会など普段の作業以外の活動や通所員の様子について詳しい報告があり、様々な質問も出されました。

●理事会主導のプログラム

理事会では今年度、組織づくりに積極的に関わる動きとして、理事の専門性を活かした様々なチームを立ち上げています。理事会当日の午後は、こうした動きについて各理事から職員への説明の時間を設け、意見交換が行なわれました。出席した職員からは、「現場を離れてこうした時間が設けられるのはとてもありがたい」という声がありました。藤井志保理事からのメッセージを掲載します。

－ぱれっと理事プロジェクト発足－

◇「対話」でつながり、アイデアをカタチに◇

ぱれっとを取り巻く環境が大きく変化する中、理事会では、これまでの会議中心の関わり方から一歩進み、理事一人ひとりが主体的に関われる場として「理事プロジェクト（通称：理事プロ）」を立ち上げました。未来に向けて「何ができるか」「何に挑戦したいか」、ぱれっとに関わるメンバーがやりがいや幸せ（Happy）を実感できる組織とはどのようなことかを語り合い、対話を通じて生まれたアイデアを具体的な行動へとつなげていくことを目指しています。

現在は、組織運営を考える「ガバナンスチーム」と、人や育成をテーマにした「人チーム」の二つで活動を進めています。1/24の職員合同理事会ではガバナンスの解説や意見交換を行ない、多くの率直な声をいただきました。今後はそれらを整理し、次年度の活動計画に反映すると共に、意見がどのように生かされたのかを分かりやすく紐付けしていきます。

皆さまの声が、より良い組織づくりの力になります。気づいたことがあれば、ぜひ気軽に事務局までお寄せください

（理事　藤井志保）

【正会員の皆様：2025年度社員総会のお知らせ】

日時：2026年５月23日（土）13：00～16：00　地域交流センター恵比寿コミュニティホール

※時間が変更になる可能性があります。詳しくは５月初めに郵送にてお知らせいたします。

報告2　渋谷区職員交換研修報告①～緊急一時なかよし～

１月20日(水)、渋谷区次世代ネットワーク実行委員会が主催の職員交換研修に行ってきました。渋谷区内にある数か所の事業所の中から私は「緊急一時なかよし」を選びました。渋谷区の一時保護制度では介護する人が急病で不在になった場合などは緊急一時保護（はぁとぴあ原宿とりばぁさいど原宿）、それ以外の用事ではちょこっとステイ（なかよし）を利用できます。

研修は、夕方から夕飯が終了するまでの時間でした。私が研修をした日は、１名の利用がありました。通所している作業所からの送迎バスが近くに停車するので迎えに行き、そのまま夕飯の買い物をしました。３泊４日利用の初日だったので、到着後先ずは薬などの持ち物を確認します。一軒家の２階部分が緊急一時の部屋ですが、食卓のある１階は18時までは放課後等デイサービスが使用しているので、それ以降に１階に下りました。夕飯までは、持参したタブレットでお気に入りの電車のYouTubeを見て楽しそうに過ごしていました。食事は、固形物を飲み込むのが難しいため、作った食事をミキサーにかけてからの提供でした。利用者によって自立度や過ごし方は異なり、一人ひとりの状態に合わせた対応をしているとのことです。この研修を通して、緊急一時保護事業や放課後等デイサービスなどのサービスがあるおかげで、自立に向けたトレーニングをしたり、余暇活動が充実したりしているのだなと実感しました。　（おかし屋ぱれっと　山元　絵里）

報告2　渋谷区交換研修報告②　～ストライドクラブ～

１月29日(木)、主に精神障がいのある人を対象とした施設「ストライドクラブ」へ職員交換研修に行きました。

ストライドクラブでは、自分のペースに合わせた作業に取り組み、自分の価値目的を取り戻すことを大切にしています。午前中は施設を運営するための事務作業・厨房作業に分かれて作業に取り組みます。私は、事務作業で会計や領収書の作成を行ないました。利用者の方は丁寧に作業のやり方を教えてくれました。厨房作業では施設での昼食を作り、皆でお昼を食べました。休憩中は個々に好きなことをして過ごし、編み物をしたり音楽を聴いたりと穏やかでした。午後はストライドクラブで作られているドリップコーヒーをハートバレーしぶやまで歩いて届けに行きました。普段から外出する機会が少ないため徒歩での移動で身体を動かしているそうです。研修終了後に施設の職員さんから「いつもはあまりやりたがらない作業に積極的に取り組んでいたり、明るい場面が見られた」と利用者の変化も感じられたとお話が聞けました。この研修を通して精神的に不安を感じる利用者のサポートに役立てたいと思いました。　（工房ぱれっと　江成　葵）

報告3　ボランタリーフォーラム「満点見本市」報告

去る 2月7日(土)に飯田橋セントラルプラザ1階のエントランスホールにて行なわれた『ふれあい満点見本市』に参加してきました。この販売会は、東京ボランティア・市民活動センター（以下東ボラ）が主催する「市民活動をつくるボランタリーフォーラムTOKYO2026」のイベントの一つで、同会場の別フロアでは翌日の8日(日)と合わせて2日間にわたり、様々な社会問題に焦点をあてた分科会が開催されていました。

昨年、夏の体験ボランティア募集で東ボラにお世話になり、そのお礼としておかし屋ぱれっとのクッキーをお渡ししたことをきっかけに、今回出店する機会をいただけることになりました。担当してくださった東ボラの職員の方は今度のたまり場ぱれっと開放日にもご参加いただくことになっています。新たな繋がりができ大変嬉しく思っています。

販売会では、他に災害支援や国際支援をしている団体がパネル展示や商品の販売をしていました。ぱれっとはおかし屋ぱれっとの商品販売と団体紹介を行ないました。当日は理事の方にご協力をいただき他の団体との交流やぱれっとの宣伝をするとても良い機会となりました。ご協力いただいた皆さま誠にありがとうございました。

（たまり場ぱれっと　武井琴美）

報告4　ぱれっと親の会企画「新年会」

1月30日金曜日にぱれっとの親の会が主催し、メンバー・親・職員・理事などの色々な立場の人が参加する新年会が行なわれました。おいしいお弁当やお菓子などを食べながらゆっくりと同じグループの人とお話をすることが出来ました。下の写真はみんなで椅子取りゲームをしている時の写真です。椅子取りゲームの前に今年の抱負を発表してからゲームが開始され、手に汗握る熱い、そして笑いの絶えない戦いが繰り広げられました。その他にも、昨年の活動や日常の写真のスライドショーが上映され、みんなで「こんなこともあったな」「またやりたいな」などと振り返る楽しい時間となりました。締めには全員で「ビリーブ」を合唱して会は終わりました。様々な立場の人たちが和やかに交流して、お互いのことを知り、親睦を深めることが出来ました。

準備をしてくださった親の会の皆様、この度は素敵な機会を用意してくださり、誠にありがとうございました。準備は大変だと思いますが、来年も楽しみにしております！！

（おかし屋ぱれっと　井上ムハンマド）

白熱！！椅子取りゲーム

報告５　ありがとう！えびす・ぱれっとホーム②

先月号では、えびす・ぱれっとホーム初期の頃から職員として働かれていた安部能樹さん（現在非常勤職員として勤務）に、グループホーム（以下ＧＨ）の理念や昔の様子などを執筆いただきました。今月号では、1993 年から 32 年間事業をしてきた建物に別れを告げる意味で、様々なエピソードをお伝えいたします。

●ＧＨ建築にあたり

えびす・ぱれっとホーム建設にあたり、故谷口政幸前会長はじめ、株式会社東京木工所様ならびに株式会社エビスグランドボウル様には大変お世話になりました。当時、制度も何も整っていない中でありながら、ＧＨ建設にご賛同いただき、会社の社員寮があった土地を無償でご提供くださり、図面を引く段階から多くの要望を取り入れていただきました。

●開設当初から緊急一時保護事業を併設

ＧＨは、おかし屋ぱれっとで働く通所員たちの親亡き後のニーズを考え、若いうちから自立した生活スキルを身に付けようとオープンしました。24 時間 365 日入居者対応を考えての職員配置が必要でしたが、６名の入居定員では常勤職員４名の人件費が賄えないことがわかり、苦肉の策として渋谷区から年間約 1500 万円の補助金を受ける形で緊急一時保護事業を請け負うことにしました。

いざＧＨ開設となりましたが、意外にもぱれっとからの入居希望は少なく、緊急一時利用も、その当時レスパイトという概念が浸透していなかったこともあり、稼働率が低い状態が続きました。緊急一時との併設は利用者や入居者にとってお互い交流となり、スタッフも学びの場となりました。

●入居は１年契約からスタート

ＧＨのコンセプトとして、親元から離れての暮らしの体験の色が濃く、1 年契約で退居する方が殆どでした。自分の部屋にテレビがないと不満を訴え自宅に戻る人も中にはいました。渋谷区内に住まわれている人の年齢も若かったこともあり、親亡き後を心配する家庭も実際には少数でした。現在のように「福祉サービスを受ける」とした考えではなく、親が子どもを社会に押し出すといった意識があまり顕著ではなかった時代でした。

福祉制度が変わっていく中で、法律も変わり、「当たり前に生きる」とした障がいある人たちの主張が世の中に広まっていきました。暮らしのスタイルも、施設から地域へと大きなうねりと変わっていきました。

●お世話になったえびす・ぱれっとホーム

定員 6 名のえびす・ぱれっとホームの現在までの利用者は延べ 20 数名にのぼります。ひとり暮らしを実現した方もいます。身の回りのことは自分できるようになることを主眼としたＧＨ、社会性が身に付いた結果でした。

一方で開設当初から暮らしている方が現在も住まわれています。隣の旧いこっとへの転居の際には別れを惜しんでいました。20 年以上住まわれた方が 3 人おり、箪笥やベッドの下の床の色の変わり様が歴史を物語っていました。沢山の人たちと関わることで成長が育まれます。ＧＨというひとつ屋根の下で共に暮らすことで、様々な人たちと出会い、別れがあり人は強くなっていきます。32 年間の思い出をありがとう。

（えびす・ぱれっとホーム
施設長　相馬宏昭）